

早稲田大学博士論文(概要)		
	学位記	文科省報告
2008	5066	甲 2846

早稲田大学大学院日本語教育研究科

# 博士学位申請論文概要

## 論 文 題 目

東京語の動詞・複合動詞アクセントの習得  
—北京・上海方言話者を対象として—

申 請 者

劉 佳琦

2009年3月

# 目 次

第1章 序章	1
1.1 本研究の背景	1
1.1.1 中国における日本語教育の現状	1
1.1.2 日本語音声教育の現状	3
1.1.2.1 中国における日本語音声教育の現状	3
1.1.2.2 学習者の学習ニーズ	4
1.1.3 中国語母語話者の日本語音声問題点	5
1.2 本研究の目的	6
1.3 本研究の意義	7
1.4 本研究の概要	7
1.4.1 本研究の各調査の内容	7
1.4.2 論文の構成と概要	8
第2章 先行研究	12
2.1 第二言語習得研究の動向	12
2.1.1 対照分析研究	12
2.1.2 誤用分析研究	13
2.1.3 中間言語研究	13
2.1.4 第二言語習得の諸仮説	14
2.1.4.1 変異性モデル (Variability Model)	14
2.1.4.2 Major の第二言語習得モデル	14
2.1.4.3 普遍文法理論 (Universal Grammar Theory)	15
2.1.4.4 有標性弁別仮説 (Markedness Differential Hypothesis)	16
2.1.4.5 最適性理論 (Optimality Theory)	17
2.1.4.6 「モニター理論」仮説	18
2.1.4.6.1 習得—学習仮説 (The Acquisition-Learning Hypothesis)	18
2.1.4.6.2 自然順序性仮説 (The Natural Order Hypothesis)	19
2.1.4.6.3 インプット仮説とアウトプット仮説	19
2.2 日本語の音声・音韻における第二言語習得研究	20

2.3	用語と概念の定義	21
2.3.1	リズム	21
2.3.2	アクセント	22
2.3.2.1	アクセントの概念	22
2.3.2.2	アクセントの分類	22
2.3.2.3	アクセントの機能	23
2.3.2.4	アクセントの一般的原理	23
2.3.2.5	アクセント核	23
2.3.3	アクセントの表記法	23
2.3.3.1	日本語のアクセントの表記法	24
2.3.3.2	中国語の声調の表記法	24
2.4	日本語のアクセント	25
2.4.1	東京語と標準語（共通語）	25
2.4.2	東京語アクセントの特徴	26
2.4.3	東京語のアクセント型	26
2.4.3.1	動詞のアクセント型	27
2.4.4	東京語のアクセント規則	28
2.4.4.1	動詞活用形のアクセント規則	28
2.4.4.2	複合動詞のアクセント規則	29
2.4.5	東京語アクセントのゆれ	30
2.4.5.1	東京語の形容詞アクセントのゆれ	30
2.4.5.2	東京語の動詞アクセントのゆれ	31
2.4.5.3	東京語の複合動詞アクセントのゆれ	31
2.5	中国方言の声調体系	32
2.5.1	北京方言の声調	32
2.5.2	上海方言の声調	36
2.5.3	北京方言と上海方言の声調体系の違い	38
2.6	東京語のアクセントと中国語の声調	40
2.7	アクセントに関する習得研究	41
2.7.1	第一言語のアクセント習得に関する研究	41

2.7.2	第二言語（又は外国語）としての東京語のアクセントの習得研究	42
2.7.2.1	東京語アクセントの知覚に関する習得研究	42
2.7.2.2	東京語アクセントの生成に関する習得研究	45
2.7.2.2.1	中国語母語話者を対象とした東京語アクセントの生成 に関する習得研究	49
2.7.2.2.1.1	動詞アクセントの生成に関する習得研究	51
2.7.2.2.1.2	複合語アクセントの生成に関する習得研究	53
2.7.2.2.2	中国方言を考慮した習得研究	54
2.7.2.3	第二言語（又は外国語）としての 東京語アクセントの習得研究のまとめ	55
2.8	第2章のまとめ	56
<b>第3章</b>	<b>調査1 —中国方言の声調の生成</b>	<b>58</b>
3.1	調査目的	58
3.2	調査協力者	58
3.3	調査内容	61
3.3.1	北京方言の調査語	61
3.3.2	上海方言の調査語	62
3.4	調査手順	63
3.5	調査の結果と考察	64
3.5.1	北京・上海方言話者による評価の結果	64
3.5.2	音響的分析	65
3.5.2.1	北京方言話者の場合	65
3.5.2.1.1	基本声調のピッチ曲線	65
3.5.2.1.2	2音節語の連読変調のピッチ曲線	66
3.5.2.2	上海方言話者の場合	68
3.5.2.2.1	基本声調のピッチ曲線	68
3.5.2.2.2	2音節語の連読変調のピッチ曲線	69
3.5.2.2.3	3音節語の連読変調のピッチ曲線	71
3.5.2.2.4	規則的変調パターン以外の声調のピッチ曲線	74
3.6	第3章のまとめ	76

第4章 調査2 一東京語の動詞アクセントの生成	77
4.1 調査目的	77
4.2 調査協力者	77
4.2.1 日本語学習者	77
4.2.2 日本語母語話者	80
4.3 調査内容	81
4.4 調査手順	83
4.4.1 生成調査の手順	83
4.4.2 評価調査の手順	85
4.5 調査結果	87
4.5.1 動詞「辞書形」の調査結果	88
4.5.1.1 正用率	88
4.5.1.2 「正用」アクセントパターン	89
4.5.1.3 「誤用」アクセントパターン	91
4.5.2 動詞「ナイ形」の調査結果	93
4.5.2.1 正用率	93
4.5.2.2 「正用」アクセントパターン	94
4.5.2.3 「誤用」アクセントパターン	97
4.5.3 動詞「テ形」の調査結果	99
4.5.3.1 正用率	99
4.5.3.2 「正用」アクセントパターン	100
4.5.3.3 「誤用」アクセントパターン	102
4.5.4 動詞「仮定形」の調査結果	104
4.5.4.1 正用率	104
4.5.4.2 「正用」アクセントパターン	105
4.5.4.3 「誤用」アクセントパターン	108
4.5.5 動詞「テイル形」の調査結果	110
4.5.5.1 正用率	110
4.5.5.2 「正用」アクセントパターン	111
4.5.5.3 「誤用」アクセントパターン	114

4.5.6	各評価者の発音評価の相関関係	117
4.5.7	調査語の既知度と正用率の相関	117
4.5.8	調査2の結果のまとめ	118
4.5.8.1	動詞アクセントの正用率	118
4.5.8.2	平板式動詞の「正用」・「誤用」アクセントパターン	119
4.5.8.3	起伏式動詞の「正用」・「誤用」アクセントパターン	121
4.5.8.4	評価者のコメント	124
4.6	考察	125
4.6.1	母方言の正負転移	125
4.6.2	言語の普遍的特徴の影響	126
4.6.2.1	平板式と起伏式	127
4.6.2.2	重音節と軽音節	128
4.6.3	音声教育の影響	130
4.6.4	動詞アクセントにおける東京語母語話者の許容度	133
4.6.5	その他の要因	134
4.7	第4章のまとめ	135
第5章	調査3 一東京語の複合動詞アクセントの生成	140
5.1	調査目的	140
5.2	調査協力者	140
5.3	調査内容	140
5.4	調査手順	142
5.5	調査結果	143
5.5.1	複合パターン1の調査結果	143
5.5.1.1	正用率	143
5.5.1.2	「正用」アクセントパターン	144
5.5.1.3	「誤用」アクセントパターン	145
5.5.2	複合パターン2の調査結果	147
5.5.2.1	正用率	147
5.5.2.2	「正用」アクセントパターン	148
5.5.2.3	「誤用」アクセントパターン	149

5.5.3	複合パターン3の調査結果	151
5.5.3.1	正用率	151
5.5.3.2	「正用」アクセントパターン	152
5.5.3.3	「誤用」アクセントパターン	153
5.5.4	複合パターン4の調査結果	154
5.5.4.1	正用率	154
5.5.4.2	「正用」アクセントパターン	155
5.5.4.3	「誤用」アクセントパターン	156
5.5.5	複合パターン5の調査結果	158
5.5.5.1	正用率	158
5.5.5.2	「正用」アクセントパターン	159
5.5.5.3	「誤用」アクセントパターン	160
5.5.6	複合パターン6の調査結果	162
5.5.6.1	正用率	162
5.5.6.2	「正用」アクセントパターン	163
5.5.6.3	「誤用」アクセントパターン	164
5.5.7	複合パターン間の差異	166
5.5.8	調査語の既知度と正用率の相関	168
5.5.9	「3拍+2拍」の調査語と「2拍+3拍」の調査語の正用率の比較	169
5.5.10	連母音の有無と正用率の関係	170
5.5.11	「ポーズの挿入」の誤用	171
5.6	調査3の結果のまとめ	172
5.6.1	複合動詞アクセントの正用率	173
5.6.2	複合動詞の「正用」アクセントパターン	174
5.6.3	複合動詞の「誤用」アクセントパターン	176
5.7	考察	177
5.7.1	母方言の正負転移	177
5.7.2	言語の普遍的特徴の影響	178
5.7.3	音声教育の影響	179
5.7.4	複合動詞アクセントにおける東京語母語話者の許容度	181

5.8	第5章のまとめ	181
<b>第6章 東京語の動詞・複合動詞アクセントの教育と学習</b>		
6.1	調査4 —教師対象のアンケートおよびインタビュー	185
6.1.1	調査目的	185
6.1.2	調査協力者	185
6.1.3	調査内容	186
6.1.3.1	教師対象アンケートの内容	186
6.1.3.2	教師対象インタビューの内容	187
6.1.4	調査手順	188
6.1.4.1	教師対象アンケートの手順	188
6.1.4.2	教師対象インタビューの手順	188
6.1.5	調査結果	188
6.1.5.1	教師対象アンケートの結果	188
6.1.5.2	教師対象インタビューの結果	190
6.2	調査5 —日本語教科書の調査	194
6.2.1	調査対象とした教科書	194
6.2.2	教科書の調査結果	197
6.3	調査6 —発音授業の参与観察	198
6.3.1	観察対象としたクラスの授業内容	198
6.3.2	参与観察の結果	201
6.4	調査7 —学習者対象のアンケートおよびインタビュー	202
6.4.1	調査目的	202
6.4.2	調査協力者	202
6.4.3	調査内容	203
6.4.3.1	学習者対象アンケートの内容	203
6.4.3.1.1	学習動機と学習ストラテジーについてのアンケート	203
6.4.3.1.2	日本語学習についてのアンケート	207
6.4.3.2	発音学習についてのインタビューの内容	209
6.4.4	調査手順	210
6.4.4.1	学習者対象アンケートの手順	210



6.4.4.2	学習者対象インタビューの手順	210
6.4.5	調査結果	210
6.4.5.1	学習者対象アンケートの結果	210
6.4.5.1.1	学習動機と学習ストラテジーについてのアンケートの結果	210
6.4.5.1.2	日本語学習についてのアンケートの結果	214
6.4.5.1.3	学習者対象アンケートの結果のまとめ	219
6.4.5.2	発音学習についてのインタビューの結果	219
6.5	東京語の動詞アクセントの教育と学習についての結果と考察	224
6.5.1	音声教育について	224
6.5.2	学習者の個人要因について	226
6.5.2.1	学習者の学習動機および学習ストラテジー	226
6.5.2.2	学習者の発音学習の取り組み	228
6.6	第6章のまとめ	229
<b>第7章</b>	<b>東京語の動詞・複合動詞アクセントの教育と学習への提言</b>	<b>232</b>
7.1	発音のニーズについて	232
7.1.1	教師の発音指導に対するニーズ	232
7.1.2	学習者の発音学習に対するニーズ	233
7.2	動詞・複合動詞アクセントの教育と学習への提言	234
7.2.1	発音教授法	234
7.2.1.1	外国語教授法の変遷	234
7.2.1.2	発音指導方法の検討	235
7.2.2	音声教育への提言	238
7.2.2.1	平板式動詞のアクセント指導	238
7.2.2.1.1	知覚と生成の関係	239
7.2.2.1.2	平板と起伏の音韻対立の指導	239
7.2.2.2	動詞の「テイル形」／「テアル形」のアクセント指導	242
7.2.2.2.1	教科書における取り扱い	243
7.2.2.2.2	動詞の「テイル形」と「テアル形」の音韻対立の指導	247
7.2.2.3	母方言の転移を考慮したアクセントの指導	248
7.2.2.3.1	北京方言の声調を利用したアクセントの指導方法	249

7.2.2.3.2	言語の普遍的特徴の活用	253
7.2.2.4	音韻知識のインプット	254
7.2.2.4.1	動詞・複合動詞アクセント規則のインプットの必要性	254
7.2.2.4.2	動詞・複合動詞アクセント規則の簡素化についての議論	255
7.2.2.4.3	動詞・複合動詞アクセント規則の指導順序	257
7.2.2.5	アクセントとその他の韻律要素の関係	258
7.2.2.6	アクセントの表記法	259
7.2.2.6.1	アクセント表記法の問題点	259
7.2.2.6.2	アクセント表記法の検討	262
7.2.2.7	アクセント指導の継続性	263
7.2.2.8	自己モニター能力の育成	264
7.2.2.9	教師養成の必要性	265
7.2.3	学習者の発音学習への提言	265
7.2.3.1	明確な学習動機	266
7.2.3.2	学習ストラテジーの使用	266
7.2.3.3	発音学習の焦点化	267
7.2.3.4	音声化した発音練習方法の使用	268
7.3	第7章のまとめ	268
第8章	まとめと今後の課題	271
8.1	本研究の成果のまとめ	271
8.1.1	アクセント習得に影響する言語的要因	271
8.1.1.1	母方言の正負転移	271
8.1.1.1.1	北京・上海方言の声調体系	272
8.1.1.1.2	アクセントの習得における母方言の正負転移	273
8.1.1.2	言語の普遍的特徴	274
8.1.1.2.1	平板式アクセントの生成の難しさについて	275
8.1.1.2.2	重音節にアクセント核を置く傾向について	276
8.1.2	教育と学習がアクセント習得に与える影響	277
8.1.2.1	音声教育の実態とその影響	278
8.1.2.1.1	音声教育の実態	278

8.1.2.1.2 音声教育による影響	279
8.1.2.2 学習者の個人要因	281
8.1.3 アクセントの教育と学習への提言	282
8.1.4 総合的な考察	284
8.2 今後の課題	287
参考文献	290
謝辞	314
資料	315

## 1. はじめに

中国語を母語とする日本語学習者にとって日本語アクセントの習得が困難であると多くの先行研究で指摘されている。特に動詞の活用時または複合動詞の場合は、単純動詞レベルのアクセントとは異なっている。その違いに気付き、疑問に思っている学習者も少なくない。ところが、このような疑問に答えられる日本語音声教育が充分に行われていないのは現状である。

本研究は中国語母語話者による日本語アクセントの習得の実態を報告し、その要因を究明するとともに、中国における日本語音声教育に提言する。

## 2. 本研究の目的

本研究では、異なる声調体系を持つ北京方言話者と上海方言話者を対象に調査（下記3.「本研究の概要」を参照されたい）を行った。以下のことを本研究の目的とする。

- 1) 東京語の動詞・複合動詞アクセントの生成状況を調査し、習得に影響する要因を明らかにする（調査1・2・3）。
- 2) 東京語の動詞・複合動詞アクセントの教育と学習を調査し、習得に与える影響を明らかにする（調査4・5・6・7）。
- 3) アクセントの教育と学習の現状を把握したうえで、北京・上海方言話者を対象とした東京語の動詞・複合動詞アクセントの教育と学習に提言する。

第二言語習得研究において、中間言語（Selinker 1972）を特徴付ける要因、①母方言の正負転移、②言語の普遍的特徴といった言語的要因に加え、③言語教育の影響、④学習者の個人要因も視野に入れ、考察を行う。

最終的な目的は、中国語母語話者による東京語アクセントの習得における様々な音声の特徴とその要因を明らかにすること、そして、それによって第二言語の音声習得研究に貢献することである。研究によって得られた知見を踏まえた上で、より効率のよい音声指導方法を考案する。

## 3. 本研究の概要

本研究では、まず北京・上海方言話者である日本語学習者を対象とした生成調査、アンケート、インタビューを行った（表1）。次に、協力校の日本語教師を対象としたアンケートとインタビューを実施した。次に、協力校で使用されている教科書を分析した。最後に、協力校で実施されている発音授業の参与観察を行った。以下では各調査の詳細について述べる。

1) 日本語学習者を対象とした生成調査、アンケート、インタビュー

日本語学習者を対象とした調査は、以下表1のとおりである。

表1 日本語学習者を対象とした調査

日本語学習者	調査内容	
①本研究の協力大学（北京3校、上海2校）の日本語学科に在籍している学習者である。	調査1 (第3章)	北京・上海方言の声調の生成調査を行い、本研究の調査協力者である北京・上海方言話者の母方言声調及び変調のピッチ実現を調査した。
②北京方言話者18名、上海方言話者21名、計39名である。	調査2 (第4章)	東京語の動詞アクセントの生成調査を行い、東京語母語話者に評価してもらい、動詞活用形のアクセントの生成状況及び母語話者の評価を調査した。
③生育地はそれぞれ北京と上海市内である。	調査3 (第5章)	東京語の複合動詞アクセントの生成調査を行い、東京語母語話者に評価してもらい、複合動詞のアクセントの生成状況及び母語話者の評価を調査した。
④日本語学習歴は2年で、調査時は大学3年生である。	調査7 (第6章6.4)	アンケート調査 ①学習動機と学習ストラテジーについてのアンケート、②日本語学習についてのアンケートを実施し、学習者側の個人要因を調査した。
⑤学習時間は週に10時間～20時間で、所属の教育機関によって異なっている。		半構造化インタビュー調査 アンケートの回答の確認とともに、学習環境、学習者の動機・ストラテジー、発音学習の取り組みについて調査した。
⑥協力者のうち、北京2名、上海5名はそれぞれ6日～15日の日本短期滞在歴がある。長期滞在歴はない。		

2) 日本語教師を対象としたアンケート・インタビュー（調査4 第6章6.1）

まず、日本語教師を対象に発音指導の意識に関するアンケートを実施した。次に、音声教育

に関する半構造化インタビューを行い、アンケートの回答を確認するとともに、音声教育の内容や方法、発音指導の取り組み状況を調査した。

### 3) 教科書分析 (調査 5 第 6 章 6.2)

協力校である北京 (3 校)、上海 (2 校) で使用されている教科書を分析した。各教科書の音声項目の記述、音声解説を分析・比較した。

北京: 『総合日語』第 1~4 冊 (彭広陸・守屋三千代編著 2004 北京大学出版社)

上海: 『新編日語』第 1~4 冊 (周平・陳小芬編著 1992 上海外国語大学出版社)

### 4) 発音授業の参与観察 (調査 6 第 6 章 6.3)

協力校で実施されている発音授業の参与観察を行った。授業の進行過程、教師の指摘・訂正、発音指導方法、練習方法、学習者の反応などを中心に観察した。

## 4. 本研究の結果

今までの中国語母語話者による日本語音声習得の研究では、主に両言語の音韻体系の違いに焦点を当て、対照分析研究の視点から論じられてきた。本研究では、中間言語音声に影響する要因、①母方言の正負転移、②言語の普遍的特徴といった言語的要因に加え、③言語教育の影響、④学習者の個人要因も考慮に入れ、東京語アクセントの習得の実態を明らかにした。さらに、本研究で得られた知見を踏まえて、東京語アクセントの教育と学習に提言した。

本研究の成果をまとめると、以下のようになる。

- 1) 東京語の動詞・複合動詞アクセントの生成調査を行い、アクセント習得に影響する言語的要因が明らかになった (4.1)。
- 2) 東京語の動詞・複合動詞アクセントの教育と学習の実態を調査し、アクセント習得に与える影響が明らかになった (4.2)。
- 3) 本研究の調査結果を踏まえた上で、北京・上海方言話者を対象とした東京語の動詞・複合動詞アクセントの教育と学習への提言を行った (4.3)。

以下では、研究成果の詳細について述べる。

### 4.1 アクセント習得に影響する言語的要因

アクセント習得に影響する言語的要因は、1) 母方言の正負転移、2) 言語の普遍的特徴である。以下では、その詳細について述べる。

#### 4.1.1 母方言の正負転移

まず、4.1.1.1では北京・上海方言の声調体系について述べる。次に、4.1.1.2では東京語の動詞・複合動詞アクセントの習得における母方言の正負転移について述べる。

##### 4.1.1.1 北京・上海方言の声調体系

第2章2.5では、北京・上海方言の声調体系の違いを理論的に記述した。第3章の調査1では、本研究の調査協力者である日本語学習者（北京：18名、上海：21名）を対象に、母方言声調の生成調査を行い、母方言の声調と変調が実現されていることを確認した。

表2では、北京・上海方言の声調体系と東京語のアクセント体系を比較している。北京方言は「音節ごとに声調が付与される」という音節声調の特徴に対して、上海方言は「音節ごとに声調が付与されるのではなく、語レベルで一つの変調パターンが実現される」という語声調の特徴を持つことが分かっている（許・湯 1988、早田 1999、袁 2001、游 2004）。上海方言の連続変調における「語レベルの声調実現」は東京語の語アクセントの単位に類似していると言われている（松本 1988、岩田 2001、佐藤 2004）。さらに、岩田（2001）は、「上海方言は各語声調の違いがピッチの下がり目の有無と位置によって記述できる」と声調言語がアクセント特性を有することを指摘した。

表2 北京・上海方言声調と東京語アクセントの比較

北京方言	上海方言	東京語
音節声調	語声調	語アクセント
音節ごとに声調が付与される*。	音節ごとに声調が付与されるのではなく、語レベルで一つの変調パターンが実現される。	語内で一度下がったピッチは二度と上がらない、第1拍と第2拍は高さが必ず違う。

\* 北京方言の「軽声」の場合は、音節ごとに声調が付与されるのではなく、第1音節の声調に付随して、第2音節の声調が変化する。しかし、軽声化する言語環境が限られており、また2音節以上の軽声化語彙が極少数である。この点については、上海方言の連続変調とは決定的に異なっているのである。詳細は第2章2.5.3を参照されたい。

このようなアクセント特性を持つ言語を母方言とする上海方言話者は、東京語アクセントの習得において、音節声調言語を母方言とする北京方言話者より有利ではないかと、王 (1991)、野沢・重松 (1997) の研究で指摘されている。しかし、東京語アクセントの生成における北京・上海方言の正負転移を実証する研究は、管見の及ぶ限り見当たらない。

#### 4.1.1.2 アクセントの習得における母方言の正負転移

本研究の調査 2 (動詞アクセントの生成)、調査 3 (複合動詞アクセントの生成) の結果から、接合動詞である動詞「テイル形」と -2 型複合動詞の生成においては、上海方言話者と比べて、北京方言話者の方が「上げ下げ型」誤用を多発していることが分かった。北京方言話者の場合は、各音節に声調が付与されるという北京方言の音節声調の特性が、東京語アクセントの生成にマイナスの影響を与え、各音節に声調を付与しているため、ピッチの上げ下げが顕著に聞こえるのではないかと考えられる。一方、上海方言話者の場合は、上海方言の「語としての声調は、各音節に声調を付与するのではなく、語レベルで一つのまとまりとして生成する」という語声調のアクセント特性が、東京語アクセントの生成にプラスの影響をしていると考えられる。

中国語母語話者による日本語アクセントの習得は、母語の声調体系の影響でピッチの上げ下げが多く、習得が困難であることが先行研究で度々指摘されてきた。しかし、中国語母語話者間にも方言差によって東京語アクセントの習得に差異が生じることが本研究で明らかになった。ピッチの上げ下げが多いのは北京方言話者のみで、上海方言話者においては、このような傾向は非常に少なかった。本研究の結果は、日本語音声習得研究において、日本語学習者の方言差を考慮する必要があることを示唆している。

#### 4.1.2 言語の普遍的特徴の影響

言語の獲得と通常の学習とは基本的に異なっているが、「基本→複雑」という過程は共通していると考えられている (Jakobson 1968)。本研究の調査 2 (動詞アクセントの生成)、調査 3 (複合動詞アクセントの生成) の結果から、動詞・複合動詞アクセントの生成において、言語の普遍的特徴の影響が見られた。母語・母方言の違いを問わず、共通したアクセント習得の特徴があることが明らかになった。

##### 1) 平板式アクセントの生成が難しい

調査 2 の結果では、すべての活用形のアクセントにおいて、平板式動詞より起伏式動詞のほうが正用率が高いことが分かった。Jakobson (1968) の「基本→複雑」という有標性の観点



から考えると、起伏式アクセントはアクセントの基本（無標）の形であり、平板式アクセントは複雑（有標）の形であるということが言える。また、第二言語習得研究においては、植田（1995）によるタイ語母語話者を対象とした研究、助川（1999）によるブラジル人日本語学習者を対象とした研究でも「平板式アクセントの生成の正用率が低い」という結果が報告されている。したがって、平板式アクセントの習得が起伏式アクセントより遅れるということは、母語の違いを問わず、「基本→複雑」という言語獲得の普遍的特徴によるものである。

「中国語の声調体系の影響で、日本語の平板式アクセントの生成が困難である」と先行研究で言われてきている（蔡 1983、楊 1993、朱 1993、橋本 1995、尤 2002）が、以上の考察によって、「平板式アクセントの生成が難しい」というのは決して声調言語を母語とする中国母語話者だけの特徴ではないことが分かった。むしろ、母語・母方言を問わず、言語の普遍的な特徴として捉えるべきであろう。

## 2) 重音節にアクセント核を置く

窪菌（2006）では、「アクセントの一般的原理」の一つとして、「軽音節より重音節がアクセントを引きつける」という「重さの原理」が提示されており、人間の言葉に広範囲に観察される一般的な原理であることが分かっている。

本研究の結果と照らし合わせてまとめると、以下のようにアクセント核が重音節に置かれている傾向があることが分かった（    は重音節）。

- ① 「ナイ形」の場合は、-2型（例、「ゆずらない」「まもらない」「のべない」）のアクセントパターンが多く生成されている。
- ② 「テ形」「テイル形」の場合は、-3型（例、「ゆずって」「まもって」）、-5型（例、「ゆずっている」「まもっている」）の促音「っ」の直前にアクセント核を置く傾向が見られた。
- ③ 複合パターン1~4の-2型複合動詞の場合は、連母音を含む音節（重音節）にアクセント核を付与する傾向がある。たとえば、「めぐりあう」である。
- ④ 複合パターン5と6の-3型複合動詞（例、「とりかえす」）の場合は、-3型が「正用」パターンとして最も出現率が高い。

ここで特筆すべき点は、以上②の起伏式動詞の「テ形」（例、「まもって」）、「テイル形」（例、「まもっている」）の場合と、③と④のアクセント核を担う音節に連母音が含まれている（例、「めぐりあう」）場合は、たまたま規則的なアクセントパターンと一致しているため、正用率が高いということである。しかし、正用率が高いのはアクセントの普遍的特徴によるもので、

習得しているとは言えないのである。つまり、正用率が高いことと習得していることとは、必ずしも因果関係があるわけではない。これは誤用分析研究の枠組みでは見逃してしまいがちな部分である。中間言語音声習得の実態を解明するためには、正用と誤用の両側面から分析を行い、両者の性質および原因を突き止める必要があることを示唆している。

また、蔡（1983）の中国語話者を対象とした研究でも、重音節にアクセント核を置く傾向が見られている。その原因は中国語の音節概念の影響であると母語からの転移を指摘している。しかし、本研究の考察から、「重音節にアクセント核を置く」というのは母語によらず、言語習得の共通した特徴であることが分かった。つまり、母語の転移というよりも、言語の普遍的特徴によるものであると解釈したほうが妥当である。

## 4.2 音声教育と発音学習がアクセント習得に与える影響

まず、4.2.1 では音声教育の影響について述べる。次に、4.2.2 では学習動機・ストラテジー、発音学習の取り組みといった学習者の個人要因について述べる。

### 4.2.1 音声教育の影響

言語教育における知識のインプットがどのように言語習得に影響を与えるかに関して、研究者の間には異論がある（詳細は本稿第2章 2.1.4.6.1 を参照されたい）。教室内で意識的に得た知識はあくまでも産出された言語形式をチェック・確認するのに使われ、言語習得には繋がらないとクラッシュェンが主張している。それに対して、習得も学習も互いに交わり、意識的な学習で得た知識が習得に影響を与えるという「インターフェイスの立場」も存在している。

本研究の協力校で、教師を対象としたアンケート・インタビュー（調査4）、教科書分析（調査5）、発音授業の参与観察（調査6）を実施した結果、北京（3校）、上海（2校）で行われている日本語音声教育の実態が異なっていることが分かった。北京（3校）では、学習者全員対象の発音授業の開講、教科書の音声解説の充実、発音指導方法の工夫などが見られた。一方、上海（2校）では、発音授業は一部の学生のみ履修できる、教科書の音声解説が少ない、発音指導方法が単調であるなどの問題が存在している。したがって、音声教育において、上海方言話者より北京方言話者のほうが、アクセントについての音韻知識のインプットが多いことが分かった。また、このような音声教育の差異がアクセントの習得に影響を与えていることが明らかになった。

### 1) 音韻知識インプットの多い北京方言話者の場合

調査2と調査3の動詞・複合動詞アクセントの生成調査の結果と照らし合わせて考察すると、音声教育によるアクセント知識と規則のインプットの多い本研究の北京方言話者のほうが、インプットの少ない上海方言話者に比べて生成されたアクセントパターンのバリエーションが多いことが分かった。また、調査7の学習者対象のインタビューでは、北京の発音上位群のほうが「アクセント規則を知っていて、生成時に規則を思い出そうとしている」と答えたことが分かった。学習者はインプットされている知識や規則を引き出し、自分の発話にその規則を適用しようとしていることが明らかになった。

### 2) 音韻知識インプットの少ない上海方言話者の場合

調査2と調査3の生成調査の結果から、アクセント知識や規則のインプットが少ない本研究の上海方言話者の場合は、-2型アクセントを多用することが明らかになった。特に、調査2の起伏式動詞の仮定形と調査3の-3型複合動詞の生成において-2型「誤用」アクセントパターンの多用が目立っている。「-2型の多用」は母語に関わらず、様々な言語の話者に共通して現れる中間言語音声習得の特徴として多くの先行研究で論じられている。本来であれば、「-2型の多用」においては、両方言話者の間に差異がないはずである。しかし、音韻知識のインプットの少ない上海方言話者のほうがより-2型に集中し、それに比べて、北京方言話者のほうが必ずしも「正用」ばかりではないが、生成されたアクセントパターンのバリエーションが多く、両方言話者の間に差異が見られた。また、調査7の学習者対象インタビューでは、上海方言話者の回答から、「動詞辞書形と活用形のアクセントの違いに気付いているが、どのように学習したらいいかが分からない」ということが分かった。

したがって、アクセント知識や規則のインプットが少ない本研究の協力者である上海方言話者の場合は、生成時に「-2型」という習得過程に最も取り入れやすいアクセント型を多用してしまいがちであることが明らかになった。

本研究の調査協力者の場合は、習得も学習も互いに交わり、意識的に得た知識も習得に影響を与えるという「インターフェイスの立場」を支持する結果となった。本来であれば、「-2型の多用」においては、両方言話者の間に差異はないはずであるが、音声教育による音韻知識のインプットの影響で、上海方言話者の場合は-2型アクセントに集中しているが、北京方言話者の場合は必ずしも「正用」ばかりではないが、アクセントパターンが拡散され、バリエーションが多いことが分かった。この事実は、第二言語音声の発達プロセスの解明に非常に大きな意味を持つ。音声教育によって、アクセントは「ある特定の型のみ使用する」の「型集中」か

ら、「必ずしも正しくないが、パターンが拡散され、バリエーションが多い」の「型拡散」にかけて発達していくものであると考えられる。したがって、音声教育による目標言語の音韻知識のインプットは、音声習得を促進する効果があることが明らかになった。逆に、音声教育が欠如している場合は、アクセント習得が遅れるか、「型集中」が化石化してしまうことが予想される。

#### 4.2.2 学習者の個人要因

調査 7（日本語学習者を対象としたアンケートとインタビュー）の結果から、発音学習、学習動機・ストラテジーといった学習者側の個人要因も音声習得に影響を与えていることが明らかになった。本研究の発音上位群と下位群の相違点に基づき、発音上位群の学習者の場合は、1) 明確な学習動機、2) 多様な学習ストラテジーの使用、3) 自己評価型ストラテジーの使用、4) 目標依存型ストラテジーの使用、5) 発音学習の焦点化、6) 音声化した発音練習方法の使用、が発音習得を向上させる共通特徴として浮き彫りになった。

#### 4.3 アクセントの教育と学習への提言

教師が音声指導を行う際に、学習者の音声の可変性ととともに、それぞれの要因内での特徴に体系的な規則があることを理解するのは重要である。それが、学習者の音声に対するより良い把握や評価の手助けとなるからである。本研究では、研究成果を踏まえた上で、以下のように音声教育と学習について提言した。

まず教師側、学習者側のニーズを分析し、次に、発音教授法の変遷およびその背景にある教育理念を概観し、近年教育現場で用いられている音声指導方法や発音教材について検討した。さらに、本研究の調査 2 と調査 3 の生成調査の結果、調査 4～7 の教育と学習の実態調査の結果を踏まえて、東京語の動詞・複合動詞アクセントの教育と学習に提言をした。

##### 1) 東京語の動詞・複合動詞アクセントの教育への提言

- ① 平板式動詞のアクセント指導について、平板と起伏の音韻対立の指導に焦点を当て、ミニマル・ペアを用いた指導方法を提案した。
- ② 動詞「テイル形」／「テアル形」のアクセント指導について、教科書・指導書での取り扱いを調査し、音韻対立として指導を行う必要性を主張した。
- ③ 母方言の転移を考慮したアクセント指導について述べ、北京方言の声調を利用した指導法、言語の普遍的特徴を利用した指導法を考案した。

- ④ 音韻知識のインプットの必要性について述べ、動詞・複合動詞アクセント規則の簡素化の可能性を検討し、指導順序を提案した。
- ⑤ アクセントと拍、ポーズとの関係について述べ、アクセント教育と併行して、拍、ポーズの指導も必要であることを主張した。
- ⑥ 教科書に用いるアクセント表記法について、まず現在使用されている表記法の問題点を指摘した。次に一般的によく取り上げられるアクセント表記法について、それぞれの特徴を検討・比較し、提案をした。

そのほか、アクセント指導の継続性、自己モニター能力の育成の必要性、教師養成の必要性についても提言した。

## 2) 東京語の動詞・複合動詞アクセントの学習への提言

本研究の発音上位群の学習者の共通特徴に基づき、アクセントの学習について、以下のように提言した。①明確な学習動機を見出すこと、②学習ストラテジーの使用（自己評価型ストラテジーの使用、目標依存型ストラテジーの使用）、③発音学習の焦点化、④音声化した発音練習方法の使用。

## 5. おわりに

本研究では、中間言語音声に影響する要因、①母方言の正負転移、②言語の普遍的特徴といった言語的要因に加え、③言語教育の影響、④学習者の個人要因も考慮に入れ、東京語アクセントの習得の実態を明らかにした。また、本研究の成果を踏まえて、アクセントの教育と学習への提言をした。

今までの研究は対照分析研究の基盤に基づいて、中国語母語話者における日本語アクセントの習得について多くの研究成果が累積されてきている。しかし、学習者音声の形成には、母語・母方言干渉以外にも多くの要因が関わっており、対照分析研究だけでは見えてこない側面が隠されている。本研究では、アクセントの習得に影響する各要因を詳細に検討することにより、学習者の母方言声調体系の影響、言語の普遍的特徴の影響、そして海外における音声教育の実態、日本語の発音を学習しようとする学習者の実態、習得に与える影響について、多角的な視点から、より深い議論ができた。

本研究で得られた知見を生かし、中国の日本語学習者の音声学習を支援し、より良い日本語音声教育を提供できるように努力する。本研究を筆者の第一歩として、今後は研究と実践の積み重ねを通して、中国における日本語教育に貢献できるよう真剣に取り組んでいきたい。